

国際ファッション専門職大学

公開講座

Professional Institute of International Fashion

2026年度・第1回公開講座 @ZOOM ウェビナー

2026 9.26 (sat)

10:00 ▶ 11:30

参加
無料

参加のお申し込みは、下記URL
より受付中です！
※QRコードからもアクセス可能
です。



申し込みフォーム ▶ <https://x.gd/D2way>

Speaker

伊藤 悟 国際ファッション専門職大学准教授

織機を奏でる、紋様を聴きなす

——徳宏タイ族社会における織りと音の日常美学

布を織るとき、そこにはおのずと音が生まれる。一枚の布は、つねにその音とともに織り成されてゆく。

かつて中国雲南省の徳宏地域には、織り音をあたかも楽器のように奏でる文化があった。タイ族の織物は、複数の綜紵を操作し、個々の綜紵に吊るした錘を鳴らしながら紋様を織りこむ。だから織り手の女性たちは、紋様を見ればそこに鳴っていた音を思い描き、音を聴けば紋様の種類や織りの質までも想像した。その不思議な響きは、耳だけでなく身体で味わう快楽であると同時に、布の出来ばえを確かめる手がかりでもあり、未婚の女性が夜に機を鳴らして思いを伝える自己呈示のメディアでもあった。また、布に織り残されるわずかな乱れは、欠陥ではなく、ある日の手が残した痕跡として聴きなされた。だがその音はいま静かに失われ、織物だけが文化遺産として脚光を浴びる。織りの陰に響いていた感性は忘れられてゆく。

これは遠い異文化だけの話ではない。モノが日々消費されてゆくその陰で、私たち自身の社会でも、作り手の身体に宿る感性が、経済的な価値の前で問われている。斜陽とされて久しい繊維産地では、古い力織機がもたらす揺らぎや手仕事の風合いに、あらたな価値が見いだされようとしている。効率と均質さばかりが尺度とされるとき、生産の過程を支えてきたはずの感覚は、いったいどこへゆくのだろうか。発表の最後には、こうした問いをアートの視座からも考える。

織機の音を現代の文脈で鳴らし直すとき、消えゆく感性は、復元すべき過去としてではなく、いまを問い直す手がかりとして立ちあらわれるのではないか。完璧さと均質さを当然としてきた現代のモノづくりのなかで、いびつさは欠陥でしかないのか。布が作られ消費されてゆく過程を陰で支えてきた感性に光をあてることは、生産や労働の価値を、働くことのなかで忘れてはならない美しさを、私たち自身の手もとで問い直すことへとつながってゆくはずである。

伊藤 悟 (Satoru Ito)

国際ファッション専門職大学 国際ファッション学部 名古屋ファッションクリエイション・ビジネス学科准教授

文化人類学・映像人類学・民族音楽学を専門とする。博士（文学、総合研究大学院大学）。中国雲南省西部やタイ北部を調査地とし、参与観察に映像制作を組み合わせ、土地の人々に師事して手仕事や芸能を学ぶ。研究以外では自らアートパフォーマンスも行う。タイ系民族の伝統芸術や織物、芸能、宗教実践を通じた感性と日常美学の考察を現在のテーマとし、消えゆく織物の復興や文字文化の保存にも現地の人々と協働して取り組む。主な業績に、単著『カーム・ソンコーカオ：徳宏タイ上座仏教社会におけるシャーマンの送霊うた』（2017）ほか。民族誌映画『こころを架けることば』（2011）はモスクワ国際民族誌映画祭で最優秀賞を受賞。